

巻頭言

健康文化 50号発刊に寄せ

佐久間 貞行

林文字先生が1989年春のある日、何時もお目にかかっているのに改まって、「相談したいことがある」と言われて部屋に来られた。

「貯めたお金がある。これをお金に困っている来日留学生の援助に役立てればと思っている。さらに出来れば放射線医学の振興に当てたい」とのことであった。財団法人の設立に当たってその目的は先述の二つであるが、これからはその先に「健康」があり、それを果たすのは医学を含む文化との考えから「健康文化」を旗印にしよう、その振興を目指す財団とのことで、今の健康文化振興財団の名称が決まった。財団設立に当たって現在極めて厳格であるが、当時でも所管の役所の許可が必要であった。先生のお志にかなう役所は厚生省（当時）か県である。健康文化創刊号で小林英二愛知県衛生部健康の森推進室室長（当時）の“健康文化を具現する「あいち健康の森」”で示された様に、愛知県は健康の森の開設準備中であり、その中に国立の長寿研究センターを誘致したいとの意向があった。設立と誘致の両方に関わっていたので当時の鈴木愛知県知事とご一緒に上京する機会があった。その折り財団のことをお話したところ県で引き受けようと言っていた。そのこともあり開設記念講演会は、財団が主催して、厚生省と愛知県の後援で行われた。当初は金利も高く利子で運用が可能であったが、金利が下がりだんだんきびしくなってきた。運用に工夫をされ、奔走されていた先生のお姿が目には浮かぶ。

財団の目的の一つ留学生の援助は留学生に喜ばれた。当時留学生の環境は貧しいもので、留学生会館も出来ておらず、医学部の留学生の宿舎の代わりに勝又病院の勝又一夫理事長にお願いして看護宿舎の一部を宿舎として使わせていただいたりしていた頃の話である。

放射線医学の振興については、関係教室の研究に対する寄付と研究者の研究費の援助が続いている。

雑誌の出版については、当初誌名を「健康文化」としたかったのであるが、すでに登録されており、振興財団紀要を付することで国会図書館に登録された。1990年6月林先生こだわりの美しい薄紫色の表紙を纏って創刊号が刊行さ

れた。この色はご出身の津島及び女学校のシンボル籐花に由来している。当初は年二回の刊行を予定実行していたが、最近は年一回となった。その分内容を充実させたいものである。

書籍の出版については、第一号が林文子先生著の教科書である。

1993年10月林文子先生は最後のご入院の際、ご信仰のカソリックの神父さまの教誨を枕頭でお受けになられた。その折り財団の発展をお気に掛けておられ託されたが十分その責を果たしておらず内心忸怩たるものがある。

現在林誠太理事長のもとで、厳しい経済の荒波の中を一般財団法人として乗り切っていただき感謝し尽くされないものがある。

(健康文化振興財団理事、名古屋大学名誉教授)

林文子先生

